

排米映画運動における常設館の動向とドイツ映画

—東京・浅草公園六区を対象にして(2)—

山本知佳

はじめに

本稿は、拙稿「排米映画運動における常設館の動向とドイツ映画—東京・浅草公園六区を対象にして(1)—」¹⁾に引き続いて、1924年の排米映画運動をめぐる常設館の動向とドイツ映画の取り扱いを検討する。

1924年にアメリカで成立した新移民法(Immigration Act of 1924)、いわゆる「排日移民法」を巡り、日本各地では個人から各種団体に至るまで様々な抗議活動が展開された。

5月末にアメリカで新移民法が成立し、対米抗議として一般市民の割腹自殺が大々的に報道されると、その多くが反米活動として捉えられる対米活動は拡大した。とりわけ、愛国団体の示威活動が活発化し、全体的にその勢いを増した。このような団体は、この法案成立以降の日本とアメリカとの政治的・経済的關係上の問題点を論ずるよりも、「アメリカ的」と見做される社交ダンスや「耳隠し」等の当時日本国内で流行したアメリカ風の風俗を排斥の標的にし、過激な抗議活動を行った。アメリカ作品に興行の多くを頼る映画業界も同様の非難を免れることはできなかった。

当時、日本で公開される外国映画は、アメリカ映画が大半を占めたことから、外国映画を上映する多くの常設館及びこれを所有する映画製作会社は、反米の世論が形成される中で、一部の愛国団体から興行方針に干渉を受けた。この状況に鑑み、東京映画業者の代表として、松竹キネマ株式会社(以下松竹)、日本活動写真株式会社(以下日活)、帝国キネマ演芸株式会社(以下帝キネ)の主要な映画会社は、6月上旬に、「米國映畫排斥決議」(以下「決議」)を発表した²⁾。上記の3社は、新移民法への抗議としてこの法律の施行日である7月1日に合わせて、アメリカ映画の買入・借入、上映の禁止を示し、全国の常設館からアメリカ映画を一掃し、代わりに日本映画とドイツ映画を中心とするヨーロッパ映画で興行を一新するよう試みたが、結果として同月の11日には、実施からわずか2週間足らずで「決議」を撤回したのであった。この運動の瓦解によって、7月下旬までには再び多くの常設館が従来通りアメリカ映画を上映することになった。

本稿は、前稿と同様に日本におけるドイツ映画の受容に関する一端を捉えようとする試み

の一環である。この時期の排米映画運動に注目し、浅草公園六区（以下浅草）を中心とした東京の常設館（含映画製作会社）の動向とそこで上映されたドイツ映画の取り扱いを捉えることを目的としている。この排斥運動により、アメリカ映画が一時的であれ、市場から駆逐されたことで、ドイツ映画は上映される割合が高まり、興行面において拡大する機会を得ることになる。前稿と本稿は、このようなドイツ映画が排斥運動を先導した松竹等の系列の常設館や独立系の常設館において、実際どのように取り扱われたのか、また、ドイツ映画は、アメリカ映画の不在にその存在感をどのように評価され、アメリカ映画の人気や名声（あるいは大衆的支持）にどこまで迫ることができたのか、その経過を明らかにすることを目指すものである。加えて、この出来事を日本におけるドイツ映画史の流れの中に位置付けるねらいもある。ドイツ映画は、1924年以降も様々なジャンルの作品が公開され、重厚な演技、深刻な作風、あるいは卓越した撮影技術等から芸術的側面を評価されて、興行・批評の両面においても常にアメリカ映画と対比される形で、独自の地位を形成していくことになる。1930年代後半からは、日本・ドイツ両国の政治的接近のためにこのような傾向が強められていくが、本稿が取り扱う状況は、短期間ではあっても、明確にドイツ映画とアメリカ映画の初めての対峙と見做すことができるからである。

前稿では、検討の対象とする期間を、「決議」以前の6月第1週から宣言取消の7月第2週を経て、アメリカ映画の上映が排斥運動以前の状況に完全に戻る7月第4週までの約7週間と定めた。その内、6月第1週から実際に排斥運動が開始される第4週半ばまでの期間のうち、東京・浅草を中心とする主要外国映画専門の常設館15館を対象として、反米的風潮の中、「決議」や排米映画運動を巡る常設館の動向とドイツ映画の取り扱いを見てきたが、その中では以下の内容を明らかにした。

この期間の常設館の動向に関しては、「決議」や排斥運動を巡って、とりわけ浅草での対立が明確化し、立場によって極めて深刻な状況に追い込まれる常設館が存在したことが特記される。激化する反米活動の影響によって、6月8日、松竹や日活等の大手映画製作会社は、新移民法の施行日である7月1日以降アメリカ映画の上映を行わないとする「決議」を発表した。「決議」を主導した松竹や日活等は、アメリカ映画の代替として自社作品の配給が可能であったが、一方、自社作品を持たない外資と直接契約を行う自由選択の常設館7館は、決議の参加の有無が館の経営に直接的に関わるために、厳しい選択を余儀なくされた。例えば、当初、浅草の千代田館は日本館とともに「決議」不参加の立場であったが、突如「決議」に加わり、日本館と明確に敵対する立場をとった。依然として「決議」に参加しない日本館は、脅迫状等による妨害行為や観客の減少以外にも、アメリカ映画排斥の立場を取る同業者からの激しい批判を受けることになった。また「決議」自体も、決して盤石な体制とは言えなかった。当初、全国規模での展開を目指したものの関西の映画事業者からの賛同を得られず、連帯に失敗したことから、当初の規模とは異なる運動の開始を迫られることになり、さらには運動を脅威と見做した警察から2度の介入を受け、離脱者を出し、また「決議」のスローガンが「米

画排斥」から「国産奨励」へ改められる等不安要素を抱えていたからである。

また、この期間のドイツ映画の取り扱いに関して述べるならば、ドイツ映画は、新聞各紙においては、排斥運動の一翼を担う存在として、アメリカ映画の不在を埋めるべく、好意的に芸術作品として取り扱われていたが、実際の興行では商業的価値を十分に見込まれてはいなかったことが挙げられる。多くの外国映画専門の常設館が存在したにもかかわらず、ドイツ映画の上映は、銀座シネマの『ウィリアム・テル』(*Wilhelm Tell*, 1923)の1作品のみであった。各常設館の番組編成の事情を考慮しなければならないが、6月第2週の排斥決議の発表後から第4週半ばまで、「決議」を主導した松竹や日活の系列館は、例えば、ドイツ映画の短編の旧作品、1作品でさえも番組編成に加えることはなかった。これは、この時期のドイツ映画の配給の不安定さを示すだけでなく、各常設館の興行におけるドイツ映画への期待値の低さ、つまり商業的価値が不十分と見做されていたことを示すものであった。

本稿では、対象時期を排斥運動が開始される6月第4週半ばから、終結し一般的な興行に落ちつく7月第4週までの期間に移行し、引き続き東京・浅草を中心とする主要外国映画専門の常設館17館を対象として、「決議」や排米映画運動を巡る常設館の動向とドイツ映画の取り扱いを検討する。

1. 対象資料

本稿の対象資料は、前稿と同様の当時発行されていた新聞と映画専門誌、各常設館が発行したプログラムである。新聞は東京府が対象であることから、当時府内で流通していた以下の各紙の関連記事や宣伝広告等の各常設館の興行情報を参考とした。主に現在も全国紙である『讀賣新聞』の他、東京五大新聞であった『東京日日新聞』、『報知新聞』、『時事新報』、『東京朝日新聞』、『國民新聞』、経済情報に重きを置いた『中外商業新報』、大衆紙として支持された『都新聞』、『二六新報』、『萬朝報』の計10紙である。映画専門誌は当時から主要な業界紙であった『キネマ旬報』の作品批評、また常設館プログラムは主に武蔵野館の『武蔵野週報』、東洋キネマの『The orient News』等の関連記事を参考とした。

2. 対象常設館

本稿が対象とするのは、上記の資料から興行情報が確認できた常設館である。前稿では、この排斥運動に関連した浅草公園六区と市内・市外に点在する主要な外国映画を上映する常設館15館を取り上げたが、本稿では、調査を進めるうち、この期間に排斥運動に関わった常設館2館を確認できたため、これを新たに加え対象となる常設館を17館とした。以下に示した常設館の分類や分布図、常設館の上映内容をまとめた【排米映画運動下における主要常設館の番組表一覧】(以下【一覧表】)は、前稿と同様のものであるが、このような新たな情報を加え、若干の加筆修正を行ったものである。前稿と重複する箇所もあるが、検討内容が継続するため使用した。

本稿が言及する常設館は、以下のようにそれぞれ松竹や日活等の系列館、外資であるアメリカの映画会社との契約館、これらに依存せず作品を上映した自由選択館の大きく3つのグループに分類できる³⁾。そしてこれらの分布図を図1として示した。

- 1：松竹、日活系列：松竹系列：浅草帝國館（浅草）、松竹館（浅草）、赤坂帝國館（赤坂）、シネマ銀座（銀座）、
日活系列：東京館（浅草）、牛込館（神楽坂）、神田日活館（神保町）
帝キネ系列他（含マキノキネマ）：キネマ倶楽部（浅草）、池袋平和館（池袋）、不二館（新宿）
- 2：外資系列（ユニヴァーサル）：日本館（浅草）
- 3：自由選択系列：千代田館（浅草）、富貴館（浅草）、東洋キネマ（神保町）、武蔵野館（新宿）、目黒キネマ（目黒）、廣尾キネマ（広尾）

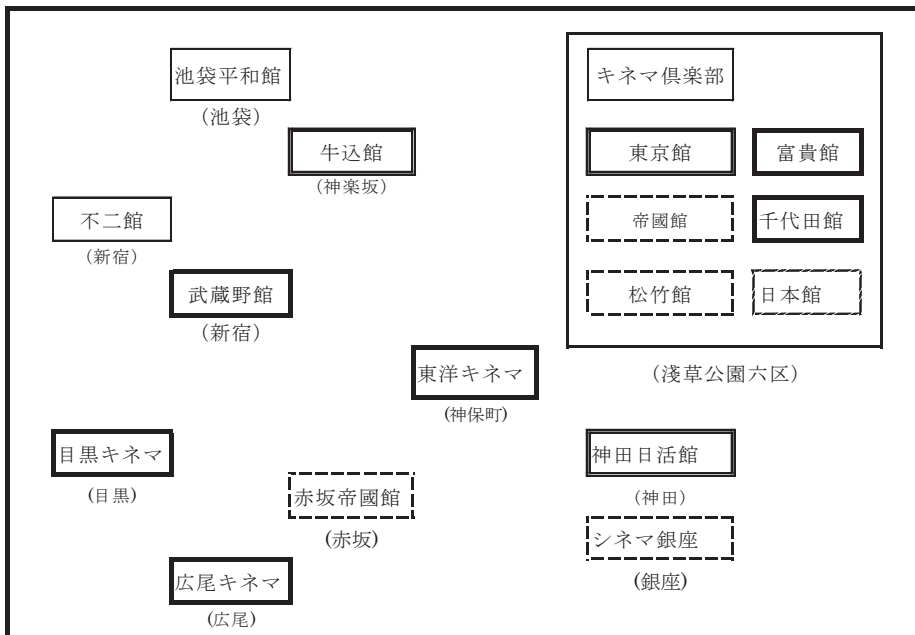


図1 1924年当時の排米映画運動における東京府下の主要常設館の分布図

(注)『日本映画年鑑大正13・4年度』より常設館情報を抜粋し作成。浅草公園六区と東京府下を分け、松竹系列は太い破線、日活系列は二重線、帝キネ系列他は実線、外資系列は太い斜線、自由選択系列は太い実線でそれぞれ囲った。線内に館名を記載し、下の括弧内には所在地を記した。

そしてこの分類に基づき、各新聞の宣伝広告や常設館プログラムを参考に上映の番組表を作成し、本稿末に【一覧表】として掲載した。ここで取り上げたのは、常設館の「館名」、浅

草公園や新宿などの「所在地」、松竹や日活、外資、自由選択の分類である「系列」、収容上限人数の「定員」、各常設館が実際行った「排斥期間」、対象時期である6月第1週から7月第4週を1週間毎に分けた「上映作品」の6項目である。また、この上映作品欄に広告に記載された宣伝文や上映の合間に行われた常設館付の楽師達によって演奏された「奏楽」を合わせて記載した⁴⁾。上映作品の推移を分かりやすくするために、アメリカ映画は作品名に下線を引き、ドイツ映画は太字で示した。また、この【一覧表】作成にあたって、旧字体で記載している箇所があるが、本稿では当時の時代的背景と資料的価値を踏まえ、該当資料をそのまま用いた。常設館の情報で確認が取れなかった箇所は「×」と記載した。以降、【一覧表】を参照しながら検討を行う。

3. 排米映画運動における常設館の動向とドイツ映画

6月上旬から過激化した対米活動の煽りを受け、外国映画専門の常設館は、大半が「決議」に従い、同月下旬には大勢が判明した。大手映画製作会社の松竹や日活、帝キネが傘下に置く東京市内の常設館は言うまでもなく、自由選択館の千代田館、東洋キネマ、武蔵野館、目黒キネマもそれぞれの興行からアメリカ映画の上映を取りやめる方針を固めることになった。一方で、アメリカ映画を継続して上映する主要な常設館は、封切館であった日本館1館のみで、二番館や三番館を含めれば「決議」に反対したマキノキネマ（以下マキノ）の不二館、根津芙蓉館、自由選択館の富貴館、廣尾キネマの5館であった。またアメリカ映画の貸出しを行う日本支社も、7月第1週目は作品の貸出しを差控え、2週目からは希望者にのみ貸出すと営業方針を変更し、この時点では、東京におけるアメリカ映画の市場は縮小する様相を呈していたのであった。ドイツ映画は、これに連動するように、各常設館ではアメリカ映画と差し替えられる形式で上映が開始されることになった。

(1) 6/27～7/3（6月第4週～7月第1週）

【主要な対米活動】

これまでの対米活動が、アメリカの新移民法が施行される7月1日に向け過激化し、さらには当日には大規模な集会在予定されていたことから、在留のアメリカ人には東京を離れるために通常の避暑の計画を早め、不可能な場合は警察へ保護を求める等の自衛措置を講じる必要が生じていた⁵⁾。これは、この期間は極めて高い緊張状態が保たれていたことを示すものであった。当日の7月1日は、東京各所で対米集会在開催されたが、その中でも特に増上寺では図2に示されるように大規模な対米国民大会が開催された。新聞各紙は、当日の様子を詳細に報道し、これまで反米運動を扇動した大行社をはじめとする各種団体が、これに呼応しビラを撒いて宣伝活動を行う様子を「排米気分」で覆われたと捉えた⁶⁾。この状況を警戒していた警視庁は、進んで在留アメリカ人を保護する等の措置を講じた。

そして当日夜に、旧アメリカ大使館跡から星条旗を奪取する事件が起こり、外務大臣であ

る幣原喜重郎が米国代理太氏ジェファーソン・キャフェリー (Jefferson Caffery, 1886-1974) に謝罪に赴くなど社会を賑わせたが⁷⁾、翌2日容疑者が大阪で逮捕され騒動が終息すると⁸⁾、目立った対米活動も見られなくなっていった。

【常設館の動向】

この週は「決議」がアメリカ映画排斥を定めた7月1日を迎えるため、「決議」に参加した多くの常設館はそれぞれ興行の方針転換を迫られた。また、いくつかの常設館は上映料金の値下げを断行した⁹⁾。松竹はこの期間に、これまでアメリカ映画の封切館であった帝國館を自社の日本映画の封切館とし、ヨーロッパ映画の上映を松竹館へ移行させた。また傘下の銀座シネマを、27日から外国映画から日本映画の上映に移行させた。タカラのキネマ倶楽部は先陣を切って前週の19日から、松竹系列の赤坂帝國館や日活系列の神田日活館、牛込館、東京館、帝キネの池袋平和館、自由選択系列の千代田館、目黒キネマ、武蔵野館は各常設館の上映番組の入れ替えと同時に27日から排米興行に舵を切った。後述するように、これらのうちドイツ映画を興行に組み込んだ各常設館は、第一週目ということもあり、封切作品や旧作であってもかつて人気を得た作品を仕立て、喜劇、冒険活劇、歴史劇、文芸劇等の様々なジャンルを揃えた上で「決議」を遂行すべく興行に臨んだのであった。帝國館と東洋キネマは新移民法施行日の7月1日に合わせたことから、「決議」の実施にばらつきを見せたが、【一覧表】を見れば、この期間に日本館以外アメリカ映画が一掃された様子がよく分かる。

このように排米の常設館の多くが、27日から日本映画とヨーロッパ映画で興行を開始させたが、28日の新聞各紙は、これらの常設館の客の不入りを伝えた¹⁰⁾。これとは対照的に、通常通りにアメリカ映画を上映した日本館は大入りであった。日本館は、「活劇大會」と銘打ちウィリアム・デズモンド (William Desmond, 1878-1949) 主演の『極悪より善人』 (*The Breathless Moment*, 1924) の他、レジナルド・デニー (Reginald Denny, 1891-1967) 主演の『第三拳闘王』 (*The Leather Pushers*, 1922)、ウィリアム・ダンカン (William Duncan, 1879-1961) 主演の『迅雷列車』 (*The Fast Express*, 1924)、ドロシー・フィリップス (Dorothy Phillips, 1889-1980) 主演の『黄金の花』 (*Paid in Advance*, 1919) の活劇や西部劇を上映した。これらは現在まで名作と位置付けられる作品ではないが、それぞれ気負うことなく楽しむことのできる内容の作品ばかりであった¹¹⁾。

このように排米の常設館の多くが、27日から日本映画とヨーロッパ映画で興行を開始させたが、28日の新聞各紙は、これらの常設館の客の不入りを伝えた¹⁰⁾。これとは対照的に、通常通りにアメリカ映画を上映した日本館は大入りであった。日本館は、「活劇大會」と銘打ちウィリアム・デズモンド (William Desmond, 1878-1949) 主演の『極悪より善人』 (*The Breathless Moment*, 1924) の他、レジナルド・デニー (Reginald Denny, 1891-1967) 主演の『第三拳闘王』 (*The Leather Pushers*, 1922)、ウィリアム・ダンカン (William Duncan, 1879-1961) 主演の『迅雷列車』 (*The Fast Express*, 1924)、ドロシー・フィリップス (Dorothy Phillips, 1889-1980) 主演の『黄金の花』 (*Paid in Advance*, 1919) の活劇や西部劇を上映した。これらは現在まで名作と位置付けられる作品ではないが、それぞれ気負うことなく楽しむことのできる内容の作品ばかりであった¹¹⁾。

また、同じ浅草に館を構えていた自由選択館の富貴館は、旧作を上映する比較的目立たない常設館で、これまでは新聞紙面上では宣伝を行ってこなかったが、反米感情が最高潮に達していたこの期間に、逆境に勝機を見出したのか、図3に示した宣伝広告をあえて掲載させ

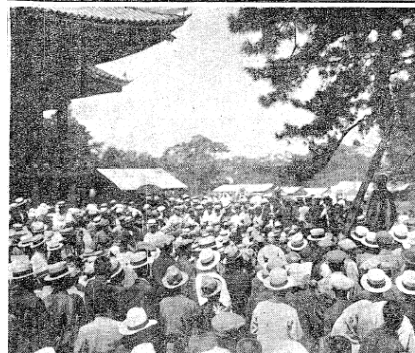


図2 増上寺で行われた対米国民大会の様子
 (『讀賣新聞』1924年7月2日朝刊、第3面)

た。富貴館は、「ブルーバード大会」と称し、第一次世界大戦中に広く人気を博したブルーバード映画の中から¹²⁾、ルイズ・ラヴリー (Louise Lovely, 1895- 1980) 主演の19世紀のフランスを舞台に資産家の令嬢と陸軍士官の恋を描いた『愛の決闘』(Bettina Loved a Soldier, 1916) の他、人情劇、連続活劇を上映した¹³⁾。

浅草を離れた地域では、主に次の2館がアメリカ映画を上映した。「決議」に賛同しなかったマキノの所有であった新宿の不二館は、著名な喜劇女優のメーベル・ノーマンド (Mabel Normand, 1892 - 1930) 主演の『スザナ』(Suzanna, 1923)、西部を舞台とした連続活劇の『幽霊の都』(The Ghost City, 1923) を自社映画の添え物として上映した。広尾の廣尾キネマは、文芸劇の『巖窟王』(Monte Cristo, 1922) を呼物として、シャーリー・メイスン (Shirley Mason, 1901-1979) 主演の『曲馬團の花』(Shirley of the Circus, 1922) の他、西部劇を上映した。これらの作品は、日本館の『極悪より善人』、『第三拳闘王』、『迅雷列車』以外は全て旧作品ではあったが、多くの常設館がアメリカ映画を排除する中では貴重で魅力的な上映であった¹⁴⁾。

これに対し27日以降の排米興行の不入りを深刻に捉えた「決議」参加館の関係者16名は、図4に示されるように30日日活本社で会合をもった。この席において、日活側は「決議」の厳守が経営困難を招くと主張し、脱退の意向を示したが、「決議」



図4 日活本社での会合の様子
(『東京朝日新聞』1924年7月1日夕刊、第2面)

の内容を緩めた妥協案の提出により日活側はこれを取り下げ、運動は継続されることになった。この妥協案とは、主に7月1日以降にやむを得ずアメリカ映画を上映する場合は事前に「決議」参加館の了解を必要とするというもので¹⁵⁾、このような事態は、「決議」を発した当初の勢いがすでに失われつつあったことを示すものであった。

帝國館と東洋キネマが排米興行を開始した7月1日には、この状態がさらに深刻化した。新聞各紙は当日の浅草の様子を詳細に報じているが、ここでは翌2日の『東京朝日新聞』の記事を引用したい。

「一日はいよいよ決議によつて米國映畫禁止興行の第一日なので浅草公園では日本館を



図3 富貴館の宣伝広告
(『都新聞』1924年6月27日朝刊、第1面)

除く外各館とも米國映畫の代りに歐洲ものを日本館フィルムの間にあしらつて觀客に備へたが初日と云ふのに頗る人出は閑散、只日本館のみは正午頃から満員大入で押すな押すな騒ぎ、割引券も館内が殆ど館詰めの有様だつたので入ることが出来ないやうな盛況を呈し■一日中に五千數百人の觀客があり、二千四五百圓からの金が上つた、が反対に米國ものを禁止した各館では一館も満員になつたものがなかつたと云ふ皮肉な現象を呈した¹⁶⁾」

この記事は、アメリカ映画の上映を継続した日本館は大盛況であったことを伝えているが、おそらくこの状態は27日から続くものであったと推測できる。これに対し帝國館をはじめ、「観客本位」の興行を謳った千代田館や「愛国の為」として「愛国者」の観覧を強調したキネマ倶楽部等の積極的に反米世論を興行に反映させた「決議」参加の常設館¹⁷⁾にとっては、まさに惨憺たる結果であった¹⁸⁾。新移民法の成立以来、反米感情の高まりだけではなく、この騒擾を回避しようとする従来の映画愛好家の傾向から、浅草の常設館の客足は落ち込んでいた。その上、1日当日は東京各所で対米集會が開催されていたため、浅草の興行街には通常時よりもさらに閑散としていたが、そのわずかな客の多くが排米興行を避け、日本館へと足を向けたのであった。

とりわけ、この状況は「決議」を牽引した松竹には大きな衝撃であったと考えられる。松竹は「決議」の実施のために系列の常設館の興行方針を大幅に見直し、フラッグシップ館の帝國館では、上映作品を外国映画から自社作品の日本映画へと轉換した。さらに興行内容においても、細やかな配慮を行っていた。例えば、新移民法を巡るアメリカの対応に義憤を覚え、反米活動に参加するような人々に対しては、軍艦マーチで知られる「大日本帝国軍艦行進曲」を奏樂に加えることで、また、日米の友好関係を憂う人々に対しては、日米の友情を築く目的で創作された『青い目をした人形は』を独奏に取り入れることで、双方に寄り添った演出を施していたことが挙げられ、帝國館の苦心が窺えるが、このような配慮は受け入れられることはなかったのであった。

【ドイツ映画】

この期間は、27日からドイツ映画がアメリカ映画と入れ替わるように精力的に上映された。【一覧表】が示したように、キネマ倶楽部の『踏繪の女』(*Die Strafe*, 1922)¹⁹⁾を皮切りに各常設館がドイツ映画を上映していくが、その中でも、東京館の『愛の復讐』(*Farsangi māmor*, 1921)²⁰⁾、神田日活館の『性の焰』(*Das Haus ohne Tür und Fenster*, 1921)、千代田館の『猛闘無敵』(*Der Herr aus dem Zuchthaus*, 1921)、目黒キネマの『エクスペロージョン』(*Schlagende Wetter*, 1923)、『ダイヤモンド』(*Die Apachen*, 1919)は封切作品であり、多くの集客を期待された。しかし、実際の興行としては、特に千代田館、東京館はアメリカ映画に比べ客足は鈍く、「困難な形勢」であると評され当初から躓くことになった²¹⁾。この状況は、対米活動が最高潮に達する7月1日を迎えても挽回は出来なかった。この「決議」のために外

国映画上映館へ移行された松竹館の連続活劇の『無頭騎手』(*Der Reiter ohne Kopf*, 1921)と悲劇の『白孔雀』(*Der weisse Pfau*, 1920)は、他館と同様に不入りで『愛の復讐』とドイツの活劇俳優ハリー・ピール(Harry Piel, 1892-1963)が監督・主演の冒険活劇『冒険の一夜』(*Abenteuer einer Nacht*, 1923)を上映した東京館に至っては、「気の毒な程しか客が見えない」と興行的には失敗と見做された²²⁾。赤坂帝國館においては、封切作品ではないが、重厚な歴史劇として前年の公開当時大絶賛された『ファラオの戀』(*Das Weib des Pharaos*, 1922)、ドイツの活劇としては比較的好評であった『スフィンクスの謎』(*Das Rätsel der Sphinx*, 1920)のともにエジプトを舞台にした2作品での特徴的な番組編成の興行であったにもかかわらず、何の話題にもされなかった。

この期間に上映された作品のうち、5つの封切作品の大半は批評面においても、主要な映画専門誌の『キネマ旬報』が以下に位置付けたように十分な評価を得られなかった。東京館の『愛の復讐』は、前年に公開された『オセロ』(*Othello*, 1922)でオセロの妻デズデモナを演じ、ささやかながらも関心を持たれていたイカ・フォン・レンケフィ(Ica von Lenkeffy, 1896-1955)が主演を務めた、男に弄ばれた女の復讐劇であったが、深い洞察や皮肉を欠いた「何とはなしに肉感的」であるだけの表面的な作品と見做された²³⁾。

神田日活館の『性の焰』は、直近では『化石騎士』(*Der steinerne Reiter*, 1923)の脚本を担当したテア・フォン・ハルプー(Thea von Harbou, 1888-1954)の小説『扉も窓もなき家』(*Das Haus ohne Tür und Fenster*, 1920)を原作に、表現主義的手法を取り入れた作品であったが、空虚な内容だけではなく、脚色・監督・俳優に問題があるとされ、不健全で「観客に嫌な氣持を起させる映畫」と酷評を受けた²⁴⁾。

千代田館の『猛闘無敵』は、エミール・マメローク(Emil Mamelok, 1882-1954)とリッシィ・リント(Lissi Lind, 1892-1938)主演の復讐劇であったが、作品の重要性からか一顧だにされず、批評の対象としては取り上げられなかった。

目黒キネマの『ダイヤモンド』は、マックス・ランダ(Max Landa, 1873-1933)扮する探偵が盗まれたダイヤモンドを取り返すという単純明快な活劇であったが、「落付き過ぎて一寸も活氣のない活劇」として全く問題にされなかった²⁵⁾。しかし同館の『エクスペロージョン』だけは、これらの中では比較的好意的に評価された作品であった。『エクスペロージョン』は、炭坑を舞台に、恋人に捨てられ未婚の母となった女が再び幸せを掴み取るまでの物語「炭坑哀歌」として紹介された²⁶⁾。主演は、歴史劇『恋のネルソン』(*Lady Hamilton*, 1921)においても主演を務めたリアネ・ハイト(Liane Haid, 1895-2000)であったが、極めて不評であったこと、また監督のカール・グルーネ(Karl Grune, 1890-1962)も前作『シャロレー伯爵』(*Der Graf von Charolais*, 1922)が凡作ではないが特筆すべき優秀作品でもなかったことから、注目される作品ではなかった²⁷⁾。しかし本作品は、ハイトを始め、俳優陣の演技は良好で、作中にいくつかの改善点はあるが全体的に散漫な印象は否めないといえながらも「丹念な描写」が支持され、従来の一部のドイツ映画作品に見られるような、醜悪な性欲描写や稚拙な怪奇

描写を取り入れていないという消極的理由から「獨逸物としてまづ上の部に位すべき作品」として評価されたのだった²⁸⁾。

これらの封切作品の興行的不安を緩和するためか、各常設館においては、多くは知名度があり批評家の高評価を得た作品が上映された。上記の東京館の『冒険の一夜』、松竹館の『無頭騎手』は、ともにドイツ映画においては軽視される傾向のあった活劇作品の中では、優良な部類であった²⁹⁾。キネマ倶楽部の『パッション』(*Madame Dubarry*, 1919)は、エルンスト・ルビッチュ(Ernst Lubitsch, 1892-1947)の代表作として知られるフランス革命を題材にした歴史超大作で「近頃に於ける堂々たる大作品」として監督・俳優ともに極めて高く評価された作品であった³⁰⁾。神田日活館の『カラマゾフ兄弟』(*Die Brüder Karamasoff*, 1921)、千代田館の影絵『眞夏の夜の夢』(*Ein Sommernachtstraum*, 1919)は、言うまでもなく著名な古典作品の映画化作品であった。また牛込館の『ヴェリタス』(*Veritas Vincit*, 1919)は、第一世界大戦後すぐに公開された壮大な作品で、直近では注目を浴びた連続活劇の『世界に鳴る女』(*Die Herrin der Welt*, 1919)においても主演を務めたミア・マイ(Mia May, 1884-1980)の日本でのデビュー作品でもあった。しかし、これらは一定の評価を得ていたとは言え、封切から平均1年以上は経過しており、『ヴェリタス』に限れば既に3年半以上が過ぎたまさに「旧作」であった。このような旧作品によって担われる興行は集客が望めなかった。

(2) 7/4～7/10 (7月第1～2週)

【主要な対米活動】

この期間には、すでに目立った対米活動は先週の増上寺の対米国民大会以降は確認できなかった。それは、国際問題になりかねなかったアメリカ国旗奪取事件の影響で、警視庁は警戒をより強化させ、これまで各地で集会を催した反米団体の調査を開始させたからであった³¹⁾。

【常設館の動向】

27日の各常設館の排米興行からすでに1週間、7月1日の対米国民大会に呼応した帝國館の上映から3日が経過していたが、日本映画とヨーロッパ映画での興行は、各常設館とも思わしくない状況が続いた。そのため、今後の興行の方針を協議すべく、再度松竹本社に各常設館の代表が会合を持ったことを『讀賣新聞』は4日に以下のように伝えた。

「先月上旬米國映畫排斥の決議をした松竹、日活、帝キネ、タカラ、千代田、武蔵野館等の各営業者も其の後實[■]困難を見るに至り屢會合協議を重ねてゐたが最近六月卅日の日活本社の協議會が硬軟二派を生じて混亂に了り該問題は全く行惱みの形をなつたので更に七月三日午前十一時から各代表が松竹本社に集合して協議會を開いたこの協議では先日軟化した日活も最初の趣旨に基いて松竹等と協力して行く意嚮を語り、又客足の減退で營業困難に落ち入つた千代田、武蔵野等の個人經營の各館も松竹日活と歩調を合せ

て行き詰まる迄猛進すると云ひ、各代表の意見が全く一致して和合的な結束を見るに至つた、一度亂れ出した各加盟者もこの日の協議で再び足並を揃へて前進する■になつた³²⁾」(下線は引用者による)

この記事には、「日活本社の協議會が硬軟二派を生じて混亂に了り該問題は全く行惱みの形をなつた」とあり、6月30日の会合時に提案された妥協案が弥縫策に過ぎなかったことが示されていたが、「又客足の減退で營業困難に落ち入つた千代田、武蔵野等の個人經營の各館も松竹日活と歩調を合せて行き詰まる迄猛進する」とあるように、それでも松竹と同調し各常設館ともアメリカ映画の排斥を継続する旨を伝えるものであった。しかし、すでに「困難に落ち入つた」状態の、ほぼ個人經營の千代田館と武蔵野館が、松竹や日活のような大資本と共に「行き詰まる迄猛進」できるかは疑問がもたれ、「決議」の中止が濃厚であると示唆する内容であった。

多くの常設館は、上映番組の入れ替えを4日に行ったが、前週と同様に、日本館、富貴館、不二館、廣尾キネマはアメリカ映画の上映を、「決議」参加の各常設館は日本映画とヨーロッパ映画の上映をそれぞれ継続させた。經營困難と伝えられた千代田館は、上述したドイツ映画を含めたイギリス映画とフランス映画のヨーロッパ映画での「米国映画より優秀たる英佛独伊四大国特選映画」と銘打つた前週の興行が不入りではあったが、この「決議」継続のため、この期間もともにイギリス映画で悲劇の『狂戀の焰』(*Lady Audley's Secret*, 1920)と連続活劇の『義侠ウルタス』(*The Hand of Vengeance*, 1918)で興行をせざるを得なかった。さらに、これには日本封切から既に10年以上も経過していたイタリア映画の『アンソニーとクレオパトラ』(*Marcantonio e Cleopatra*, 1913)が上映に含まれており、名作ではあったとしても全体的に注目を集める番組編成ではなかったと考えられる。これは、アメリカ映画の空白をヨーロッパ映画で埋める興行が、すでに2週目で行き詰まっていたことを示すものだが、他の常設館の上映作品から見てもこの傾向は千代田館に限った状況ではなかった。このようなことから、「決議」の継続が常設館の実際の興行に大きな負担となっていたことが分かる。

【ドイツ映画】

この期間も各常設館は排米興行を継続し、多くのドイツ映画が上映された。特に目黒キネマにおいては、「歐洲名画週間」として全てドイツ映画で上映が行われた。しかし、これらのうち、封切作品は武蔵野館の『黄金狂乱』(*Alles für Geld*, 1923)、松竹館の『幽魂は語る』(*Zwischen Abend und Morgen. Der Spuk einer Nacht*, 1923)、目黒キネマの『ボイトラー對チャップリン』(*Boytler kontra Chaplin*, 1921)の3作品のみで前週から封切作品が減少した。この3作品のうち松竹館の『幽鬼は語る』は、ヴェルナー・クラウス(Werner Krauß, 1884-1959)演じる死者と交信できる墓守りと彼を取り巻く人々を描く神秘劇で、これまで日本においてドイツ映画の作風の1つとして受け入れられてきた分野であり、俳優達の演技も好ましく捉えられ深みのある作品として認められたが³³⁾、他の2作品は良作とは見做されなかった。

武蔵野館の『黄金狂乱』は、エミール・ヤニングス (Emil Jannings, 1884-1950) 演じる成金の拝金主義者がその信念のために息子の死を招く社会悲劇で、監督のラインホルト・シュンツェル (Reinhold Schünzel, 1888-1954) は前2作品『マリア・マグダレナ』 (*Maria Magdalena*, 1920) と『王城鬼バルサモ』 (*Der Graf von Cagliostro*, 1920) の公開で知名度を高めていたことから本作品は期待が持たれたが、ヤニングスの行き過ぎた演技と監督の独善的な作風が批判された³⁴⁾。また、目黒キネマの『ポイトラー対チャップリン』は、ロシア出身のアルカディア・ポイトラー (Аркадий Аркадьевич Бойтлер, 1895-1965) による一風変わった短編喜劇であったが³⁵⁾、特に話題にはされなかった。直近ではヤニングスは『ファラオの戀』において、クラウスも『オセロ』においてすでにドイツ映画の有名俳優として知られてはいたが、芸術的評価を得ていてもこの時期に普段アメリカ映画を喜ぶ客層に足を向けさせ、観客を取り込む程には、知名度も吸引力も欠けていたのであった。

各常設館は、前週に上映した作品をそれぞれ差し替え興行に当てたため、2週に渡り同様のドイツ映画が近隣の常設館で上映された。日活系列の常設館が特に顕著で、東京館の『性の焰』は神田日活館から、神田日活館の『ヴェリタス』は牛込館から、牛込館の『カラマゾフ兄弟』は神田日活館、『愛の復讐』は東京館から移行された。また、赤坂帝國館の『ダイヤモンド』は目黒キネマから、目黒キネマの影絵『夏の夜の夢』は千代田館から、『シャロレー伯爵』は東洋キネマからそれぞれ移行された。

これら以外では、第1週の興行と同様にこれまで一定の評価を得ていた作品が上映された。

赤坂帝國館の『奇遇の三人』 (*Landstraße und Großstadt*, 1921) は、コンラート・ファイト (Conrad Veidt, 1893-1943) 主演の数奇な運命を辿る男女3人の物語で、「人物の描寫等も脚色と共に粗漏千萬」と指摘されつつも「氣分劇」として独自の雰囲気をも漂わせていると評価された作品であった³⁶⁾。東京館の『巨人コラン』 (*Der Galeerensträfling*, 1919) は、パウル・ヴェゲナー (Paul Wegener, 1874-1948) 主演の脱獄囚コランを巡る「陰惨な氣分の時代探偵劇たる事を記憶すべき映畫³⁷⁾」とされた犯罪劇であった。牛込館の『花嫁人形』 (*Die Puppe*, 1919) は、ルビッチュが監督した貴族の青年が人形と結婚しようとする風刺劇で「近來の大喜劇たる價值は充分ある映畫」と称賛されていた³⁸⁾。武蔵野館の『化石騎士』 (*Der Steinerne Reiter*, 1923) は、ルドルフ・クライン・ロッゲ (Rudolf Klein-Rogge, 1885-1955) 主演の表現主義派の作品として、全体的に粗削りで演出やセットについて改善点を指摘されつつも、独特な作風のために「普通以上の極めて異色ある映畫³⁹⁾」として位置付けられていた。しかし、目黒キネマの『颱風の魔女』 (*Die Taifunhexe*, 1923) だけは上記の作品とは評価が異なっていた。この作品は、洋上での水夫と魔女との遭遇を描いた神秘劇風の物語であったが、「幼稚なしかも概念的な愚劣な映畫⁴⁰⁾」として酷評されていた作品であった。

この期間のドイツ映画の興行は、前週以上に旧作品によって担われていた。『幽魂は語る』のような高く評価される作品はあったが、多くの常設館が比較的新作ではあっても凡作か旧作品での興行は、やはり新鮮さを欠いた印象を与えただろう。さらに、ドイツ映画の重厚な

雰囲気や陰惨なある種の生々しさが高尚な雰囲気をおも映画愛好者には歓迎される場合もあったが、アメリカ映画と同様に一般大衆に受け入れられたとは考えにくいものであった。

(3) 7/11～7/17 (7月第2～3週)

【主要な対米活動】

この期間には、目立った対米活動は確認できなかった。わずかに、仏教団体が、対キリスト教の宗教活動の一環として継続していると一部の報道が見られたが⁴⁰⁾、2～3週間程前には大行社が行っていたような過激な示威活動は完全に下火になったと見ていいだろう。これらの主な原因を挙げるならば、前週から警視庁が依然として強い警戒態勢を敷いていること、すでに扇動者を失った運動自体に一般市民の関心が薄れたことが挙げられる。またこの新移民法の成立・施行が日本人の移民先を制限し、第一次世界大戦の戦勝国であり、いまや欧米列強と並ぶ「大国」の国民たる自負心が傷付けられた以外は、市民生活に直接的な打撃を与えなかった点もその一因として考えられる。

【常設館の動向】

11日の各常設館の宣伝広告欄に、池袋平和館、千代田館、東洋キネマ、目黒キネマの4館はアメリカ映画を上映番組に組み込んだ広告を突如掲載し、実際にアメリカ映画の上映を再開した。池袋平和館、千代田館、目黒キネマの3館は2週間、東洋キネマは10日間で「決議」を抜けたことになる。池袋平和館と東洋キネマは主にチャップリンの短編喜劇を、また目黒キネマはヨーロッパ映画に人気俳優のロイド・ヒューズ (Lloyd Hughes, 1897-1958) 主演のメロドラマ『嵐の判決』 (*Judgement of the Storm*, 1924) を合わせ上映した。千代田館に至っては、宣伝広告に「愛活家各位の熱烈なる御希望と同志の善良なる諒解の許に」とこの方針転換の釈明を加え、「雷遊独得超ニコニコ猛闘劇大會」と銘打ち全てアメリカ映画での興行に戻った。排米興行の開始からこの時点まで、浅草はアメリカ映画を封切上映する日本館だけではなく旧作品のみを上映する富貴館までもが、「決議」参加の松竹や日活等の大資本の常設館よりもはるかに賑わいを見せた⁴²⁾。これとは対照的に、「決議」参加の常設館、特に上記の自由選択館の資本を持たない常設館は深刻な客離れと経営不振に陥り、排米興行を放棄せざるを得なかったのである。

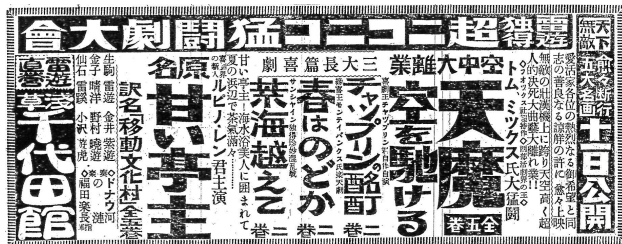


図5 千代田館の宣伝広告
 (『東京日日新聞』1924年7月11日夕刊, 第3面)

前週、排斥運動の継続を巡って各常設館の代表者は再度話し合いの場を設け「決議」の継続を再確認したが、この週には「決議」の発起人である松竹や日活等が、このような事態の継続は困難であると考えて、「決議」の撤回を検討するために11日に三度松竹本社において会合を持ち⁴³⁾、翌12日には新聞各紙に図6のように関東の映画業者4社の連名で「決議」を撤回する宣言文を掲載させた。これに前後し、松竹キネマは『讀賣新聞』の取材において、松竹は今後もあくまでも日本映画の発達のために日本映画を主軸とする旨を述べ、他館との対抗上アメリカ映画上映の可能性を示唆したが⁴⁴⁾、これは排米興行が事実上の収束を迎えたことを意味したものであった。この排米映画運動は、こうして開始から2週間足らずで終了することになった。

「決議」の中心を占めた日活は、この宣言文が掲載された12日当日には系列の東京館、神田日活館、牛込館他の番組編成にアメリカの喜劇スターであるハロルド・ロイド (Harold Clayton Lloyd, Sr., 1893-1971) の『落膽無用』(Never Weaken, 1921) を急遽追加し、図7のように新聞各紙において大々的な宣伝を行った。日活はこの作品をすでに上映されていた番組編成に「特別番外」として組み込むことで、1日でも早く興行を軌道に戻すように努めたのであった。また、「決議」の急進派であったキネマ倶楽部は、前月19日から26日間排米興行を継続していたが、15日に「超ニコニコお笑ひ週間世界的奇眼兒！大競演」と銘打ち、喜劇王として知られるマック・セネット (Mack Sennett, 1880-1960) の『豪傑バンターピン』(A Small Town Idol, 1921)、活劇スターであるダグラス・フェアバンクス (Douglas Fairbanks, 1883-1939) の『ナット』(The Nut, 1921) でアメリカ映画の上映を再開させた。この傾向はさらに広がり、排斥運動での損失を取り戻すように早急に以前のアメリカ映画を中心にした興行へと戻っていくことになった。



図6 「決議」を撤回する宣言文
 (『萬朝報』1924年7月12日朝刊, 第5面)



図7 日活系列の『落膽無用』の宣伝広告
 (『東京日日新聞』1924年7月13日夕刊, 第1面)

【ドイツ映画】

この期間には、排米映画運動は瓦解し始め、正式な「決議」の撤回により、各常設館でアメリカ映画の上映が再開され実質6月27日以前の興行に戻るようであった。しかし、アメリ

カ映画上映の再開でドイツ映画は前週からは減少したが、まだ多くが上映されていた。これらのうち、封切作品は神田日活館、牛込館の『勇者の精華』(*Menschen und Masken. 1. Der falsche Emir, 2. Ein gefährliches Spiel*, 1924)、武蔵野館の『コーカサスの春』(*Der Ruf des Schicksals*, 1922)、目黒キネマの『Zの四十二』(*Der Würger der Welt*, 1919)の3作品のみであった。この3作品のうち神田日活館と牛込館の『勇者の精華』は良作と見做されたが、他の2作品は十分に評価されなかった。

『勇者の精華』は、ハリー・ピール監督・主演の冒険活劇で、ピールが一人二役を演じ「獨逸活劇の白眉」と紹介されただけでなく⁴⁵⁾、ドイツ特有の「深刻さ」が薄められ面白味のある場面が多い「ドイツ活劇の中では上乘の部に属すべき作品」として高く位置付けられた⁴⁶⁾。ピールの作品は、これまでの排米興行中に『冒険の一夜』は東京館において、『無頭騎手』は松竹館において上映されたが、ともに評判が高く、アメリカ映画が量産した活劇とは異なる魅力を認められていた。『コーカサスの春』は、『スワリン姫』(*Die Prinzessin Suwarin*, 1923)で知られるクゼニア・デスニ(Xenia Desni, 1894-1962)主演の愛と復讐の間で揺れ動く女の物語であったが、脚本、監督、俳優の演技に対して「何等の価値のない映畫⁴⁷⁾」と酷評を受けた。また目黒キネマの『Zの四十二』は、直近では『大競馬』(*Das Derby*, 1919)で主演を務めたレオ・コンナルド(Leo Connard, 1860-1928)とマックス・ランダの「ラジウム分子の秘密」を巡る探偵劇であったが、内容の陳腐さからか、または上映館の重要度からか批評の対象にはならなかった。

これら以外では、特別取り上げるような作品は上映されなかった。赤坂帝國館は全てドイツ映画の上映であったが、『白孔雀』は松竹館から移行された作品であったし、連続劇の『無頭騎手』は前週からの継続作品で、『ウィリアム・テル』は同系列の銀座シネマにおいて前月に上映された旧作品であった。また松竹館と東京館においては、前週からの連続劇である『無頭騎手』と、『巨人コラン』の後編が継続して上映された。牛込館においては、ルビッチュ作品の評判の良い『花婿探し(牡蠣の王女)』(*Die Austernprinzessin*, 1919)が上映された。

この期間から興行にアメリカ映画が返り咲いたために、ドイツ映画を含めたヨーロッパ映画の上映割合が低下し作品数もその影響を受けた。排米興行が終了し、以前の興行の大勢に戻ることで、一度は拡大されたドイツ映画の上映環境も縮小していく兆しを見せた。

(4) 7/18～7/24 (7月第2～3週)

【主要な対米活動】

なし

【常設館の動向】

この期間には全ての常設館が排斥興行をやめ、従来のアメリカ映画を中心とした興行へと戻った⁴⁸⁾。武蔵野館、目黒キネマは18日に、帝國館は20日にアメリカ映画の上映を再開し、「決議」により前月末に日本映画専門館に移行した銀座シネマも同日に従来の外国映画専門

館へ戻った。また、これとは逆に当月1日に日本映画専門館から外国映画専門館へ移行した松竹館も20日に元の状態へ戻った。

上記の常設館を含め、これまでの排米興行で多く損失を生じさせた各常設館は、早急にアメリカ映画による興行の立て直しを図った。とりわけ、帝國館は興行の落ち込みを挽回すべく、「米国名画大會」と銘打ち評判の高い作品を揃えて興行に臨んだ。図8はこの期間の宣伝広告であるが、集客を望めるような以下の作品で編成された。『虎狼の巷』(Fantômas, 1921)は、一世を風靡したフランス映画『ファントマ』(Fantômas, 1913-1914)シリーズのアメリカ版で、エドワード・ローズマン (Edward Roseman, 1875-1957) とエドナ・マーフィ (Edna Murphy, 1899-1974) 共演の連続活劇であった。この作品は、1922年に同館で封切され2年程度経過していた旧作品であったが、「単なる活劇のみの連続劇と比べて格段の相違⁴⁹⁾」と極めて高く評価されていた。添え物の『山河に轟く』(Are you a Failvre?, 1923)は、ロイド・ヒューズとマジ・ベラミー (Madge Bellamy, 1899-1990) 共演の活劇の封切作品で、監督トム・フォーマン (Tom Forman, 1893-1926) の鮮やかな手腕、背景や撮影の美しさから「興味本位の映畫として普通以上の作品⁵⁰⁾」と称賛された。また『武士道華やかならざりし頃』(When Knights Were Cold, 1923)は、後に「極楽コンビ」として人気を博すことになるローレル&ハーディ (Laurel and Hardy) のスタン・ローレル (Stan Laurel, 1890-1965) 主演の喜劇作品であった。



図8 帝國館の宣伝広告(『讀賣新聞』1924年7月20日日刊, 第4面)

この宣伝文には「愈々捲土重來西洋映畫封切専門」と記載され、この「決議」やこれまでの運動を失敗と認識する姿勢を示したものであった。しかし同じく「決議」に参加した武蔵野館は、同様の宣伝広告に「米画排斥問題の真相と其経過を週報上に発表し公平なる御批判を乞ふ⁵¹⁾」との宣言文を掲載し、「決議」を巡る参加館同士の衝突、「決議」の成立背景と内実を問題視し告発するかのような姿勢を示した。

またこれに加え、この1か月以上続いたアメリカ映画を排斥する風潮のために、映画業界は多大な経済的損害を受けたとの試算が、『讀賣新聞』において報じられた。(図9)。この記事は、排米映画運動による観客の減少とアメリカ映画の在庫のフィルム代の金利を含めた常設館の損害の総額が50万円に上ると伝えたものだった⁵²⁾。この排米映画運動は、アメリカ

映画を映画興行から排除することに失敗しただけではなく、一時的であっても、映画という娯楽に対する大衆の支持も失う結果を招いたのであった。

【ドイツ映画】

この期間のドイツ映画の上映は、すでにアメリカ映画が大半を占める興行に戻ったことから前週よりも大幅に減少した。上映作品は、東京館と牛込館の『勇者の精華』、武蔵野館の『幽魂は語る』、松竹館の『無頭騎手』の3作品のみで、前週からの継続か他館からの移行した作品であった。また各常設館も封切作品を持たなかつただけでなく、排米興行中に一定の評価を得ていた旧作品を上映したようには、ドイツ映画を興行に起用しなかつた。各常設館は、排米興行のために減らした収益をアメリカ映画の上映で取り戻さねばならず、興行価値の見込めないドイツ映画を上映番組に組み込む余地はなかつたためである。

まとめ

本稿は、東京・浅草公園六区を中心とする主要外国映画専門の常設館を対象として、アメリカの新移民法に対する反米的雰囲気の中、1924年6月下旬から7月下旬までの約4週間にわたり、映画興行を取り巻く状況を確認した上で、各常設館がどのように変容していったか、そしてそこでドイツ映画がどのように取り扱われていったのかを見てきた。前稿で示したように、6月上旬にはすでに反米活動は激しく、アメリカ映画を上映する環境は厳しいものであった。愛国団体は、アメリカ映画の興行に干渉し、多くの常設館（含映画製作会社）はこれを様々な利害のために受け入れた。松竹等は「米國映畫排斥決議」を発することでアメリカ映画を一掃し、日本映画とヨーロッパ映画を興行の前面に押し出そうと試みた。ドイツ映画がこの試みの一翼を担い、アメリカ映画の代わりに多数の作品が上映されることになった。各常設館は、封切作品や旧作品であってもかつて人気を得た作品を仕立て、喜劇、冒険活劇、歴史劇、文芸劇等の気負うことのない短編喜劇から格調高い芸術作品まで様々なジャンルを揃えた上で興行に臨んだ。しかし結果として、このアメリカ映画の排除を目論んだ「決議」と運動は、これに関係した各常設館の興行利益を損なわせ、一般大衆の映画に対する支持を低下させただけで短期間で撤回された。この期間には、神秘劇の『幽魂は語る』、冒険活劇の『勇者の精華』のような称賛された作品も上映され、名優との呼び声高い多くのドイツ俳優がこれまでになく映写幕を賑わせたが、深い感銘を与えるような作品はなく、全体的にはドイツ映画は、アメリカ映画を受け入れてきた一般大衆の人気を得るには至らなかつ



図9 「米國映畫を見ぬ代りに日本物も見ない観客 総計五十万圓の大損害」 (『讀賣新聞』1924年7月20日朝刊, 第2面。)

た。ドイツ映画に特徴的な「深刻さ」や「仰々しさ」、高踏的と受け止められる作風の在り方が浸透していなかっただけでなく、『勇者の精華』のような「深刻さ」が軽減された冒険活劇でも十分に親しまれていたとは言えなかったのである。

興行におけるアメリカ映画の空白は、ドイツ映画をより広範に認知させ、大衆の支持を受ける機会ではあったが、十分にその存在感を発揮することはできなかった。アメリカ映画に対する一般大衆の厚い支持はもちろん、作品の内容と大衆的な受容の問題以前に、排米興行の実施期間が2週間程度と短期であったこと、定常的に作品の配給を維持できなかったこと等の期間と配給体制の問題点もあり、この時点では、ドイツ映画はアメリカ映画の代わりとして、興行を維持するほどの大衆の支持や環境をまだ得られていないことが明らかになった。

今後は、この主題で海外領土を含めた日本全域を対象にして当時のドイツ映画の受容を検討したい。反米活動は各地で展開され、映画興行にもその影を落としたはずである。とりわけ、国際貿易港を備え外国人が多く居留した横浜、松竹と日活による排米興行の提案を退けた大阪を中心とした関西、本州とは異なり外資との直接契約や自由選択が主流であった函館と札幌を有した北海道の各地域は、映画興行においても東京とは異なる魅力に富んだ主要都市・地域であり、排米映画運動においても独自の経過を辿ったと考えられる。今後は、それぞれ検討の対象として、当時の排米映画運動における常設館の変容、ドイツ映画の在り方を捉えることを目指したい。

注

- 1) 拙稿「排米映画運動における常設館の動向とドイツ映画—東京・浅草公園六区を対象にして(1) —」『研究紀要』(100) 日本大学文理学部人文科学研究所編, 2020年, 43-65頁。
- 2) この会議は松竹本社で開かれた。この会議の主要な参加者は、東京活動映画業者の代表者と示された以下の7名であった。松竹：堤支配人、日活：根岸支配人、帝キネ：廣田初■, タカラ商会：立石駒吉、武蔵野館：角間啓二、千代田館：生駒雷遊、活動新聞：岡村紫峰「米國製の映畫は一切うつつさぬ」『東京日日新聞』1924年6月9日朝刊, 第7面。
- 3) この分類は、現時点での調査で明らかになった情報をもとに作成している。各館の分類であるが、調査の資料不足から暫定的な大まかな分類となっている。例えば赤坂帝國館は、『日本映画年鑑』によれば、松竹だけではなくユニヴァーサルとも契約していたとされるが、実際は松竹の系列館であるため、ここでは松竹のグループに分類した。また、キネマ倶楽部に関して、同館の興行は新聞紙面の宣伝広告欄に確認できるが、『日本映画年鑑』には所在の記載がなかった。しかしキネマ倶楽部の所有者がタカラ商会の立石駒吉であり、立石が帝キネに所属していたこと、また上映作品に同社の作品があったことから帝キネと同じグループに分類した。武蔵野館は『日本映画年鑑』の記載に従えば、松竹の系列に属するが、武蔵野館が発行したプログラム『武蔵野週報』や東洋キネマのプログラム『The Orient News』によれば、1924年(大正13年)6月～7月時点では松竹とは関わりのない自由選択館であったと確認できることから、本稿では武蔵野館を自由選択館として取り扱っている。
- 4) この「奏楽」は、各常設館によって楽師の構成や選曲など形態が異なる。例えば、浅草公園

六区の日本館のように新聞の宣伝広告に奏楽の曲目を記載しない場合もあれば、同地区の帝國館のように曲名を明記し「四十名大奏楽」と銘打って宣伝する館もある。本稿が取り上げた17の常設館は、奏楽に基本的に欧米の有名なオペラやクラシックの曲目を採用する場合が多いが、上映作品の内容や社会状況合わせるなど各常設館の独自性が窺える。

- 5) この期間の東京市内のアメリカ人を中心とする外国人の動向を以下の新聞各紙が報道した。「身邊の危害を氣遣つて米人が避暑を急ぐ 輕井澤日光其の他はモウ既に申込みがある」『二六新報』1924年6月28日朝刊, 第3面。「脅え切つた在留米國人東京に約五百人 續々保護願」『萬朝報』1924年7月1日夕刊, 第2面。「おじけた米人警察へ保護願あすの封米大會を控へて」『國民新聞』1924年7月1日夕刊, 第3面。
- 6) 「雪と散る…宣傳ビラ 對米國民大會に呼應して全市に排米氣分を」『讀賣新聞』1924年7月2日朝刊, 第3面。
- 7) 「米大使館旗を快漢盗んで逃ぐ」『報知新聞』1924年7月2日朝刊, 第9面。
- 8) 「米旗を奪つた快漢大阪で逮捕さる」『讀賣新聞』1924年7月3日朝刊, 第3面。
- 9) 「いよいよ活動値下廿七日から斷行と決定」『萬朝報』1924年6月26日夕刊, 第3面。
- 10) 「米國映畫に肉皮な大入りけふ初日の排米活動値下げに見物は大喜び」『時事新報』1924年6月28日夕刊, 第6面。
- 11) とりわけ『迅雷列車』は、連続劇を好む観客を満足させる要素が盛り込まれており、映画に気晴らしを求める観客には適した娯楽作品とされた。和田山滋「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第166号(1924年7月21日発行), 19頁。
- 12) ブルーバード映画は、ユニヴァーサル社 (Universal Film Manufacturing Company) の子会社として1916年に設立され、第一次世界大戦中に日本において多く上映されて人気を博した。田中純一郎の『日本映画発掘史』によれば、ブルーバード映画は、「人生や恋愛に憧れを持つ夢追い青少年の柔らかい情操に向くように、ロマンチックな物語を骨子とし、背景や出演俳優にもどぎついものは避けるようにして、明るい人情劇風な狙いを持った映画」として日本映画にも影響を与えたと説明されている。田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』中公文庫, 1975年, 257-260頁。
- 13) この作品のラヴリーは、ブルーバード映画で人気を博した、エラ・ホール (Ella Hall, 1896-1982), マートル・ゴンザレス (Myrtle Gonzalez, 1891-1918), ヴァイオレット・マースロウ (Violet Mersereau, 1892-1975) と共に「四名花」の一人として数えられている人気女優であった。石巻良夫『欧米及日本の映画史』プラトン社, 1925年, 148-149頁。
- 14) とりわけ不二館の『幽霊の都』は、「柔道の亂取りでもして居るような痛快味」が評価され、興行価値のある連続活劇として見做されていた。田村幸彦「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第155号(1924年4月1日発行) 26頁。
- 15) 「危ない足並みで決議に猛進」『東京朝日新聞』1924年7月1日夕刊, 第2面。
- 16) 「米國映畫が肉皮にも大入り 禁止各館は寂れて」『東京朝日新聞』1924年7月2日朝刊, 第7面。
- 17) 前掲拙稿, 53-54頁。
- 18) この記事は日本館が「一日中に五千數百人の觀客」を得たとしてその盛況ぶりを伝えたが、これとは反対に『國民新聞』では、同日のキネマ俱樂部が名作と名高いドイツ映画の『パッション』 (*Madame Dubarry*, 1920) を上映したにもかかわらず、観客が「百人足らず」と伝えた。

- キネマ倶楽部の規模から考えて、いかに当日が閑散としていたかを如実に示したものであった。「皮肉な大入り 排米國映畫のけふ 淺草各館を覗いて 獨逸物の所は皆不入り」『國民新聞』1924年7月2日夕刊、第3面。
- 19) 『踏繪の女』は、実際はオーストリアのサシャ社 (Sascha Film-Industrie AG) の作品であるが、ドイツのウーファ社 (Universum-Film AG) によって配給されたため、ドイツ映画として紹介・上映された。本作品は、ルシー・ドレイン (Lucy Doraine, 1898-1989) 主演の旧約聖書を題材とした内容で、後に『悪魔の満潮時』と改題され、翌1925年4月3日邦楽座において上映された。
- 20) 『愛の復讐』は、東京館においても、『キネマ旬報』の紹介においてもドイツ映画として紹介されたが、実際はハンガリー映画であると思われる。『キネマ旬報』は、本作品を「獨逸ウーファ映画」とし、原題を「In the Ecstasy of the Carnival」と記載していたが、ドイツ映画のウェブサイト [filmportal.de <https://www.filmportal.de>] に該当する作品はなかった。監督のマルティン・ガラス (Márton Garas, 1881-1930) の作品と主演のレンケフィの出演作を調査したところ、ハンガリーのコルヴィン社 (Carvin Filmgyárés Filmkereskedelmi Rt.) 製作の *Farsangi mámor* (1921) が出演者、巻数、作品の内容に合致したため本稿においては、本作品を *Farsangi mámor* と見做し、原題にこのタイトルを付した。
- 21) 「映畫週報 日、歐、米映畫人氣くらべ」『國民新聞』1924年6月28日朝刊、第6面。
- 22) 同注18)。
- 23) 内田岐三雄「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第166号 (1924年7月21日発行)、19頁。
- 24) 内田岐三雄「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第165号 (1924年7月11日発行)、19頁。
- 25) 飯島正「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第165号 (1924年7月11日発行)、18頁。
- 26) 宣伝広告『エクスプロージョン』『キネマ旬報』第161号 (1924年6月1日)、38頁。
- 27) 『恋のネルソン』は、ナポレオン戦争で活躍したイギリスのネルソン提督の愛人として知られるエマ・ハミルトン (Emma, Lady Hamilton, 1765-1815) の生涯を題材にしたものである。リヒャルト・オスワルド (Richard Oswald, 1880-1938) が監督を務め、当時のドイツ映画界を代表する俳優が集結したにもかかわらず、「戦敗後の疲れたる病的神経から生れた變態的映畫」として原作から脚本、監督に至るまで全てが「低劣」であり、「獨逸映畫が今迄に示して來た缺點短所を完膚なきまでに網羅した一大集大成」と痛烈な批判を浴びた。主演のハイトに関しては「妥協的な生慍い演技」と手厳しい評価を受けた。飯島正「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第139号 (1923年7月11日発行)、14頁。
- 28) 飯島正「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第165号 (1924年7月11日発行)、18-19頁。
- 29) 特に『冒険の一夜』は、アメリカの活劇が格闘に重点を置く傾向とは異なり、皮肉味を織り交ぜ、ヨーロッパ大陸の風土や特性を活かした波乱に富んだ内容は、「活劇といつたものをよく心得てゐる」と高く評価された。「主要外國映畫批評」『キネマ旬報』第148号 (1924年1月21日発行)、10頁。
- 30) 『パッション』は、フランス王ルイ十五世の公妾デュバリー夫人の数奇な運命を描いた作品として1922年11月に同館において公開された。監督のルビッチュは、これまで日本においては『呪の眼』(*Die Augen der Mumie Ma*, 1918) を除く『田舎ロメオとジュリエット』(*Romeo und Julia im Schnee*, 1920)、『出世靴屋』(*Schuhpalast Pinkus*, 1916)、『花嫁人形』(*Die Puppe*, 1919)、『男になつたら』(*Ich möchte kein Mann sein*, 1918)、『白黒姉妹』(*Kohlhiesels Töchter*,

- 1920) の風刺的な喜劇作品が多く公開されていたことから、喜劇監督の印象が強かったが、重厚な歴史劇の本作品の公開によって、新たに歴史劇の名手として名声を築くことになった。「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第118号(1922年11月21日発行), 10頁。
- 31) 「対米運動に当局の眼光る 旗取り事件に懲りて矯風会まで危険視」『報知新聞』1924年7月5日朝刊, 第9面。
 - 32) 「みだれかけた足なみを揃へて」『讀賣新聞』1924年7月4日朝刊, 第3面。
 - 33) 飯島正「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第167号(1924年8月1日発行), 27頁。
 - 34) 同注23)。
 - 35) ボイトラーはロシア出身の映画監督兼俳優で、ソビエト連邦からドイツ、チリ、メキシコにおいて映画製作に従事した。ボイトラーのベルリン滞在は1920年～1922年と短く、現在ではほとんど知られていないが、本作品の他に *Boytler tötet Langeweile* (1921), *Boytler sucht Stellung* (1922), *Boytler im Lunapark* (1923) の計4作品を製作した。
 - 36) 「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第133号(1923年5月11日発行), 13-14頁。
 - 37) 「主要映画批評」『キネマ旬報』第93号(1922年3月11日発行), 5頁。
 - 38) 「主要映画批評」『キネマ旬報』第84号(1921年11月21日発行), 6-7頁。
 - 39) 内田岐三郎「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第155号(1924年4月11日発行), 25頁。
 - 40) 飯島正「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第155号(1924年4月11日発行), 26頁。
 - 41) ビタリと歌んだ排日騒ぎ 代りに出たのが丸い頭 サア之れからが互に鎬を削る大舞臺」『二六新報』1924年7月12日朝刊, 第2面。
 - 42) 「宣言とり消し 米國映画がなくちや食つてゆけぬと一排斥逆戻り」『讀賣新聞』1924年7月12日朝刊, 第3面。
 - 43) 同上。
 - 44) 同上。
 - 45) 宣伝広告『勇者の精華』『キネマ旬報』第165号(1924年7月11日発行), 22頁。
 - 46) 飯島正「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第167号(1924年8月1日発行), 28頁。
 - 47) 同上。
 - 48) 例えば、前週15日にアメリカ映画の上映を再開させたキネマ倶楽部は、好評のため満員大入りとなり興行を延長させていた。番組編成だけでなく、客足も「決議」以前に戻った格好であった。「活動寫眞」『國民新聞』1924年7月20日夕刊, 第2面。
 - 49) 「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第109号(1922年8月21日発行), 13頁。
 - 50) 田村幸彦「主要外国映画批評」『キネマ旬報』第170号(1924年9月1日発行), 27頁。
 - 51) 宣伝広告(武蔵野館)『都新聞』1924年7月18日朝刊, 第6面。
 - 52) 「米國映画を見ぬ代りに日本物も見ない観客 總計五十万圓の大損害」『讀賣新聞』1924年7月20日朝刊, 第2面。

【排米映画運動下における主要常設館の番組表一覧】

館名	帝國館	松竹館	赤坂帝國館	シネマ銀座
所在地	浅草公園	浅草公園	赤坂見附	銀座
系列	松竹キネマ	松竹キネマ	松竹キネマ ユニヴァーサル	松竹キネマ
定員	872	480	578	350
排斥期間	1924年7月1日～19日 ^⑨	×	1924年6月27日～?	1924年6月27日～7月17日?
6月第1週 (6月5日～)	6/5～『魂は歸り行く』/『豪 勇無敵』/『大きな赤ん坊』/ 『夜の怪鳥』【奏楽】「カ パレリア・ルスチカナ」		6/6～『スザナ』/『大速力 王』/『藍の爪』【奏楽】 「マイ・オールド・ケン タッキーホーム」	6/6～【六日より直營披露 第二回興行】『ウィリア ム・テル』/『活路は輝 く』/『鉄拳第一』/『ぐ しょ濡れハム』/実写『黒海 の門戸』【奏楽】「セレ ナーデ」
6月第2週 (6月12日～)	6/12～【萬難を排して久々お 待兼名画愈公開】『ペン ソッド』/『金鐘に咲く花』/ 『悪魔の花園』/『遠慮する な』/『ホソ坊展覧會』【奏 楽】「自働車旅行」		6/13～【特別大興行】『愛 の燈明』/『風雲のゼンダ 城』/『藍の爪』【奏楽】 「ユーモレスク」	6/13～【喜劇の大會】『若 き日の夢』/『甘い仲だよ』 /『ハムの太公望』/『おや 飛出した』/『新血と砂』/ 『響カラ教育』【奏楽】 「サウンド・フロム・ア イルランド」
6月第3週 (6月19日～)	6/19～『本町通り』/『猛虎 一聲』/『ブルの荒療治』/ 『思い知ったか』/実写『船 舶界の驚異』【奏楽】「ア ルジェリア」		6/20～【喜活劇大會】『不 盡の熱火』/『轟く凱歌』/ 『藍の爪』【奏楽】「天 国と地獄」	6/20～『懐かしの小唄』/ 『魂は歸り行く』/『夜の怪 鳥』【奏楽】「輕騎兵」
6月第4週 (6月25日～)	6/25～【米國映畫最終興行來 る一日より新作松竹蒲田映 畫封切代表館】『女は曲 者』/『雪谷の快婦』/『棚 から牡丹餅』/『我子の寢 顔』【奏楽】「小夜楽アミ ナ」/「子供と小鳥」	6/27～『茶を作る 家』/『永遠の母』/ 『劍舞の娘』7/1 ～【深刻妖艶なる 歐州映画愈々七月 一日より公開】 『情炎の焰』/『無 頭騎手』/『白孔 雀』【奏楽】「カ ルメン」	6/27～『ファラオの戀』/ 『スフィンクスの謎』 【奏楽】×	6/27～『骨盗み』/『委細面 談』/実写『映画になる迄』 【奏楽】×
7月第1週 (7月4日～)	7/1～【大革新第一面興行・ 松竹蒲田世界的大作】 『詩人と運動家』/『夜の一 幕』(独奏：平野松枝『青い 目をした人形は』)【奏楽】 「東洋風旋律東洋ダンス」/ 「東洋風旋律キスマット」/ 「大日本帝國軍艦行進曲」	7/7～【妖怪劇週 間】『幽魂は語 る』/『無頭騎 手』/『靈魂の不 滅』【奏楽】 「ラ・パロマ」	7/4～『奇遇の三人』/ 『ダイヤモンド』/『處 女時代』【奏楽】×	7/4～『日曜日』/『踊りの 夜』/『佛様をて』【奏 楽】×
7月第2週 (7月11日～)	7/11～【蒲田新作二大名画】 『大尉の娘』/『白壁の家』 【奏楽】「ダブリン溝の出 征」/「後甲板の上」	7/13～【ニコニコ 大會】『荒れ狂ふ 猛犬』/『いろいろ 御厄介』『車力は 辛いよ』『海邊の 小町』『無頭騎 手』【奏楽】×	7/11～『ウィリアム・テ ル』/『白孔雀』/『無頭 騎手』【奏楽】×	7/11～『茶を作る家』/『旋 風』/『女の一生・はたちの 頃』【奏楽】×
7月第3週 (7月18日～)	7/20～【満天下の期待】【帝 國館は愈々捲土重來西洋映 畫封切専門】【松竹外国映 畫全国封切場】『虎狼の 巷』/『山河に轟く』/『武士 道?やかならざりし頃』 【奏楽】「サンチアゴ」	7/20～『牡丹燈 籠』/『乳姉妹』/ 『火華』		7/18～『現代の女性』/『ス キートホーム』/『愛に魅 る』/『忍術ごっこ』【奏 楽】×

館名	東京館	神田日活館	牛込館
所在地	浅草公園	神田	神楽坂
系列	日活 フォックス	日活	日活
定員	579	639	493
排斥期間	1924年6月27日～7月10日㉔		
6月第1週 (6月5日～)	6/5～牛込館と同一の内容： 『スピードキング/單身肉迫』 /『無敵一喝』/『恐怖の未 來』【奏楽】「戦挺」	6/5～【大パラマウント社超特作 映画】『アダムス・リップ』/『ペ ルシアの暴君』/『恐怖の未來』 【奏楽】「ラスト・ステー ル」	6/5～東京館と同一の内容：『ス ピードキング/單身肉迫』/『無敵 一喝』/『恐怖の未來』【奏楽】 「青藍のダニープ」
6月第2週 (6月12日～)	6/13～牛込館とほぼ同一の内 容：『飛出す活動』/『野獣か 人か』/『曲馬團の花』/『恐 怖の未來』【奏楽】「支那街 の夜」	6/13～『嵐の娘』/『無敵の一 喝』/『恐怖の未來』/『スピ ード・キング/單身肉迫』【奏楽】 「ケンタキーホーム」	6/13～東京館とほぼ同一の内 容：『野獣か人か』/『恐怖の未 來』/『曲馬團の花』/『金の 蔓』他【奏楽】「アウリスの イフィゲニア」
6月第3週 (6月19日～)	6/20～『颱風の娘』/『ロイド の水平』/『恐怖の未來』【奏 楽】「トラヴィアタ」	6/20～『断腸の笛』/『曲馬團の 花』/『野獣か人か』/『恐怖の未 來』/『飛出す活動』【奏楽】 「秋の女王」	6/20～『激怒』/『最後の艇 身』/『恐怖の未來』/『飛出す活 動』【奏楽】「礼拝堂の印度 人」
6月第4週 (6月25日～)	6/27～『愛の復讐』/『冒険 の一夜』【奏楽】「ハンガリ ア・ラスビル」	6/27～『カラマゾフ兄弟』/『性 の焰』【奏楽】「大序曲：輕騎 兵」	6/27～『ヴェリタス』/『コルシ カの兄弟』/漫画『美術畫家』 【奏楽】「円舞曲：春の装ひ」
7月第1週 (7月4日～)	7/4～『巨人コラン』/『コル シカの兄弟』/『性の焰』 【奏楽】「カルメン」	7/4～『ヴェリタス』/『小天 使』【奏楽】「サンタクロ ス」	7/4～『カラマゾフ兄弟』/『愛 の復讐』/『花嫁人形』/実写 『鳳凰山の従走』【奏楽】「ス ペイン小夜曲」/「ラバロマ」
7月第2週 (7月11日～)	7/11～【お盆興行活劇週間】 『プロテア』/『巨人コラ ン』【奏楽】「ウォルツエ ス」/「パノールサタネラ」 7/13～【特別番外として各館 上映】『ロイドの落膽無用』	7/11～【新連続大活劇映画公開】 『勇者の精華』/『愛の復讐』/ 実写『伊勢湾頭海軍基本演習の 壯觀』【奏楽】「メリーウィ ドー」7/13～【特別番外として各 館上映】『ロイドの落膽無用』	7/11～【お盆興行活劇週間】 『勇者の精華』/『花婿探し』/ 『我等の若き日』【奏楽】「海 上生活」7/13～【特別番外とし て各館上映】『ロイドの落膽無 用』
7月第3週 (7月18日～)	7/18～『勇者の精華』/『善悪 の境』/『ロイドの落膽無用』 【奏楽】「スパニツシ・セレ ナード」	7/18～『激怒』/『戀の睡蓮』/ 『恐怖の未來』/『ロイドの落膽 無用』/『朝日週報』【奏楽】 「ソルヴェチスソクケ」	7/18～『金色夜叉』/『勇者の精 華』/『ロイドの落膽無用』【奏 楽】「御挨拶」

館名	キネマ倶楽部	池袋平和館	不二館
所在地	浅草公園	池袋	淀橋成子(新宿)
系列	タカラ商会 帝国キネマ	東亜キネマ 帝国キネマ	東亜キネマ/帝国キネマ マキノキネマ
定員	468	398	552
排斥期間	1924年6月19日～7月14日?	1924年6月27日～7月10日⑭	×
6月第1週 (6月5日～)	6/5～【奉祝週間超活劇】 『13の秘密大會』/『義侠一徹』/『東から西へ』/ 『素敵だなア』【奏楽】 「續イル・トラバートレ」	6/6～『放埒娘』/『由利刑事』/ 『三勝半七』/『奇妙なトランク』/ 『びつくりしやつくり』 【奏楽】「ポロネーズ」	6/6～『人形の家』/『忠と考』/ 『鐵窓に見る月』/『樂園の野獸』 【奏楽】×
6月第2週 (6月12日～)	6/12～『三銃士』/『13の秘密大會』/ 『赤毛布の兒』 【奏楽】「輕騎兵」	6/13～『假面の毒婦』/『散り行く花』/ 『復讐鬼』/『山猫の眠』/ 『おお涼しい』【奏楽】 「ホフマンの舟唄」/「スバニッシュダンス」	6/13～『絶海の處女』/『血櫻』/ 『樂園の野獸』/『林檎』 【奏楽】×
6月第3週 (6月19日～)	6/19～【巨星井上正夫週間】 【涙の映画集】『寒椿』/ 『大尉の娘』/『靈光の岐』 【奏楽】「長唄：勸進帳」	6/20～『涙の街』/『ヤングラジセ』/ 『安田作兵衛』/『お祭佐七』 【奏楽】×	X
6月第4週 (6月25日～)	6/25～【悲恋涙猛闘劇】 『アルプスの花』/『雛奴の死』/ 『踏繪の女』/『男の行く道』 【奏楽】「天国と地獄」7/1～【内容整然たる大名画を特に普通料金にて提供】 『パッション』/『愛憎の極み』/実写 『秩父・長瀬絶勝』【奏楽】 「長唄：越後獅子」	6/27～【國難記念週間】 『國聖日蓮』/『血櫻』/『結婚すべからず』/ 『女に甘き男の群れ』 【奏楽】「長唄：鶴亀」	6/27～『血染めの聯隊旗』/ 『雲母坂』/『スザナ』/『幽靈の都』 【奏楽】×
7月第1週 (7月4日～)		X	7/4～『千里一蹴』/『大久保彦左衛門』/ 『戀の?人』/『幽靈の都』 【奏楽】×
7月第2週 (7月11日～)	7/6～【驚譚大活劇週間】 『死のマチステ』/『マチステの航海』/ 『マチステの遺書』【奏楽】 「芸術家の生活」	7/11～『猛襲乱闘』/『チャップリンの冒険』/ 『チャップリンの入院』/『チャップリンの消防去』/ 『軍神廣瀬中佐』/『男が妻を撰ぶ時』/ 『大久保彦左衛門』 【奏楽】×	7/11～『地獄谷』/『由利刑事』/ 『忠治の愛刀村正』/『幽靈の都』 【奏楽】×
7月第3週 (7月18日～)	7/15～【超ニコニコお笑ひ週間】 世界的奇眼兒！大競演 『豪傑バンタービン』/『ナツト』/ 『五九郎の撮影所訪問』/ 『上つたり下つたり』 【奏楽】×	X	7/18～『廣瀬中佐』/『討たるゝ者』/ 『狂戀の踏舞』/『幽靈の都』 【奏楽】×

館名	日本館	富貴館	千代田館	東洋キネマ
所在地	浅草公園	浅草公園	浅草公園	神保町
系列	ユニヴァーサル	自由選択	自由選択 パラマウント	自由選択
定員	800	×	361	750
排斥期間	×	×	1924年6月27日～7月10日⑩	1924年7月1日～10日⑩
6月第1週 (6月5日～)	6/5～【大活劇週間】『嵐の娘』/『突撃王』/『鷲の爪』/『ベギイの意気』 【奏楽】×		6/5～【天下無敵海陸猛闘超ニコニコ大会】【御成婚奉祝記念】『絶海の處女』/『デブの百萬長者』/『チャップリン活躍』/『ロイドの活動見物』 【奏楽】「フオックスストロツト」「ワンステツプ」	6/6～【第3回文藝週間】『センチメンタル・トミー』/『キャプテン・フラカサ』/実写『春の日本アルプス踏破』/『朝日映畫週報』【奏楽】「セビリアの理髮師」
6月第2週 (6月12日～)	6/13～【大喜活劇週間】『轟く凱歌』/『當世俄か成金』/『鷲の爪』/『金持少年』/実写『國際時報』【奏楽】「秋の女王」		6/12～【満員御禮特選三大名画】『嵐の判決』/『ラスト・トレール』/『快選夜嵐』 【奏楽】「ロジカ」	6/13～『シャーロックホームズ』/『汚水より星へ』/『朝日映畫週報』【奏楽】「序曲：ロマンティック」
6月第3週 (6月19日～)	6/20～【ニコニコ大活劇週間】『勇敢なる消防夫』/『困った花婿』/『鷲の爪』/『雪辱の決戦』/実写『國際時報』【奏楽】×		6/19～【旋風式總捲り猛闘喜活劇大会】『鐵蹄の轟』/『大陸突破』/『一大椿事外號々々』/『チャップリンの移民』/『法螺吹き競争』【奏楽】「ファースト」	6/20～『我が戀せし乙女』/『大北の怪異』【奏楽】「スパニッシュ・ダンス」
6月第4週 (6月25日～)	6/27～【活動大会】『極悪より善人』/『第三拳闘王』/『初篇：迅雷列車』/『黄金の花』 【奏楽】「キャンパス、エコーズ」	6/27～【ブルバード大会】『愛の法闘』/『拳闘家ドニラン』/『男子の意気』/『ライオンマン』 【奏楽】×	6/27～【見よ！堂々たる新陣容を！！米国映画より優秀たる英佛独伊四大国特選映画】『義侠ウルタス』/『戀のサルタン』/『猛闘無敵』/影絵『眞夏の夜の夢』【奏楽】「序曲：モザイツク」	6/27～【米映画御名残り。グリフィスとパーセルメスの四日間！】『愛の花』/『東への道』/『朝日映畫週報』7/1～【北歐文藝映画短期公開】『僧房夢』/『シャロレー伯爵』/『朝日映畫週報』【奏楽】「アモデス」/「ホフマン物語」
7月第1週 (7月4日～)	7/4～【特別大提供】『ショウク』/『闇の女神』/『第三拳闘王』/『迅雷列車』/『人間以上』【奏楽】×	7/4～『無邪気な娘』/『森林の娘』/『ライオンマン』	7/4～【歐洲映画の精華を讃えよ】『アントニーとクレオパトラ』/『義侠ウルタス』/『狂戀の焰』/『夜はいく』【奏楽】「アンニー・ローリー」	7/4～『スパルタのマスコット』/『呪ひの絆』/『朝日映画週報』【奏楽】「序曲：我れ若し王者なりせば」
7月第2週 (7月11日～)	7/11～【短期興行】『生氣淫洩』/『舞踏會の夜』/『深紅の空の下』/『二國旗の下』【奏楽】×7/14～【お盆興行】『虎狼の決戦』/『第三拳闘王』/『第三迅雷列車』/『嵐はからんや』/実写『國際時報』第20號【奏楽】×		7/11～【雷遊独得超ニコニコ猛闘劇大会】『天鷹空を馳ける』/『春はのどか』/『チャップリンの酷酷』/『甘い亭主』/『荒海越えて』【奏楽】「ドナウ河の漣」	7/11～【ニコニコ大会】『紐育の十字路』/『三笑士』/『ホテル・ボーイ』/『のらくら』/『チャップリンの放浪者』/『朝日映畫週報』【奏楽】「セレナーデ」/「モ・ナ・ルウ」
7月第3週 (7月18日～)	7/18～【活動大会】『靈力世界』/『乾坤一擲』/『迅雷列車』/『珍拳闘王』/実写『國際時報』第22號【奏楽】×		7/18～【涼味湧然清氣■暑中見御伺三大名画】『ジャックキー』/『男の藝』/『馬上のロメオ』【奏楽】「ザ・ライトブリゲート」	7/18～『心なき女性』/『嵐の判決』【奏楽】「トレジョリワルツ」/「エイントワイゴツトファン」

館名	武蔵野館	目黒キネマ	廣尾キネマ
所在地	新宿	目黒	広尾
系列	自由選択	自由選択	自由選択
定員	682	500	353
排斥期間	1924年6月27日～7月17日?	1924年6月27日～7月10日④	×
6月第1週 (6月5日～)	6/6～【高評名画週間】『若き日の夢』/『ハムの大公望』/『おや飛出した』/『新血と砂』/『やくざ者』【奏楽】「マイオールドケンタッキーホーム」	6/6～【痛快週間】『猛襲亂闘』/『地獄谷』/『歩み疲れ』/『コンクリン喜劇』/『フォックスニュース』/『朝日週報』【奏楽】「カルメン」	6/6～【三大名畫奉祝大興行】『紐育の寵児』/『駿馬の決勝』/『良人の危険時代』【奏楽】「女王の秘密」
6月第2週 (6月12日～)	6/13～【獨得傑作】『グラムビー』/『魂は歸り行く』/『夜の怪鳥』【奏楽】「序曲：ハンガリアン・ラストピース」	6/13～『或る幸運兒』/『永遠の處女』/『晩年の誘惑』【奏楽】「組曲：オリエンタル『印度より』1：セバヤテレス, 2：パイセガンジス, 3：パトロール」	6/13～【超百萬弗映画告別興行】『メリーゴーランド』/『黄金の枷』/『ペルシャの暴君』【奏楽】×
6月第3週 (6月19日～)	6/20～【米國映画最後の公開】『悪魔の花園』/『ペンロッド』/『愛の黎明』【奏楽】「エコー」	6/20～【ドミユ傑作大會】『怪潭夜嵐』/『アダムスリブ』/『グラムビー』【奏楽】「序曲：エグモンド」	6/20～『スピードキング/單身肉迫』/『騒ぎと誇張』/『豪勇ロイド』/『旅役者』/『素人寫眞』【奏楽】×
6月第4週 (6月25日～)	6/27～【輿論に鑑み米國映画排斥】『日曜日』/『アントニーとクレオパトラ』/『紅戀の渦巻』【奏楽】「陽気な女房」	6/27～【獨逸映画第一回封切】『エクスプロージョン』/『ダイヤモンド』/『ボンベイ最後の日』【奏楽】「組曲：ジャポネ」1：サラシ, 2：オエド, 3：カツポレ	6/27～『巖窟王』/『曲馬團の花』/『俠義の勇士』/『コンクリン大當り』/『金蔓』/『名優の片影』【奏楽】×
7月第1週 (7月4日～)	7/4～【果然高評・蒲田特作と独逸名篇】『茶を作る家』/『黄金狂乱』/『化石騎士』【奏楽】「マヌエット」/「ハンガリアンダンス」	7/4～【歐洲名画週間】『眞夏の夜の夢』/『颱風の魔女』/『シャロレー伯爵』/『ボイトラー對チャップリン』/『朝日週報』【奏楽】「アイダ」	7/4～『馬上ロメオ』/『最後の一艇身』/『無敵の一喝』/『飛んだ清遊』他実写映画【奏楽】×
7月第2週 (7月11日～)	7/11～【お盆興行・国民奮起の秋御熱望に依り特に上映!】『大和魂』/『コーカサスの春』/『情熱の焰』【奏楽】「天国と地獄」	7/11～【特別大興行】『神と人』/『Z四十二』/『嵐の判決』他【奏楽】舞踊曲コペリア「祭典ダンス及時の圓舞曲」/「ツアルダス」	7/11～『長恨歌』/『砲弾ジャック』/『拳闘王』/『困った花婿』/『合棒』【奏楽】×
7月第3週 (7月18日～)	7/18～【米映画上映に就て】 【米面排斥問題の真相と其経過を週報上に発表し公平なる御批判を乞ふ】『モヒカン族の娘』/『本町通り』/『幽魂は語る』【奏楽】「バルカローレ」/「コサツクの酒宴」	7/18～【涼味。清爽。烈日の娛樂ハ是非当館へ。】『地獄花』/『海のモーラン』/『自動車屋』/『おゝ涼しい』【奏楽】「ダニユープの漣」	7/18～『金色の絞首台』/『二國旗の下』/『新拳闘王』/『勇敢なる消防士』【奏楽】×